

手工科成立過程期における日本とスウェーデンとの教育交流

— 手工科に与えたスロイドの影響の再評価 —

横 山 悦 生

概 要

1. 本稿の目的
2. 手工科導入の経過に関する先行研究と本稿の課題
3. 手工科導入に至るまでの背景
4. ネース・スロイド教員養成所と日本とのかかわり
5. 野尻と後藤がネースで学んだこと
6. 上原六四郎の手工教育理論へのスロイドの影響
7. おわりに

概 要

日本に手工科が導入された1880年代後半の時期には、文部省はスウェーデンのスロイドとフランスの手工科に注目していた。スウェーデンのネースのスロイド学校の創設者であるアブラハムソンと日本人(九鬼隆一、手島精一)との交流は1878年にはすでに始まっていた。その後、手島精一とオットー・サロモン(ネース・スロイド教員養成所長)との手紙の交換がなされ、スロイドの教育内容や教育方法の調査のために野尻精一と後藤牧太がネース・スロイド教員養成所に派遣された。野尻や後藤がここで学んだことの一つは、手工科教育の目的を「形式的陶冶」におく「普通教育としての労働教授」であった。

導入当時の文部省の「手工教育」という概念は、普通教育としての側面だけではなく、職業教育としての側面もあわせふくむものであった。1885年の『小学教員万国教育会』においてスウェーデンのスロイド教育が大きな注目を浴びており、サリシーはそれを高く評価していた。このことが野尻や後藤が、フランスではなくスウェーデンのネースに派遣された1つの理由であったと考えられる。

手島精一らの努力により、1886(明治19)年5月から手工科は制度化された。その経過を示す直接的な史料が知られていないので、あまりはっきりしたことはわかっていない。手工科教育の設置に重要な役割を果

たした手島は、万国博覧会等で見聞した知見から、直接にスウェーデンのスロイドに学ぶ必要があると考えて、野尻と後藤をネースに派遣する便宜をはかった。こうした経過で、野尻と後藤はネースのスロイドを直接に学ぶ機会に恵まれた。帰国後の彼らの果たした役割をみると、高等師範学校において後藤が主として担当したのは理科であり、そのかわり一時手工を教えていた。また、東京工業学校に師範学校手工科教員養成のためにおかれた機械科特別課程で後藤は手工科教授法を担当した。これらの点で後藤の果たした役割は重要である。しかし、この機械科特別課程は1894(明治27)年に廃止された。また、その後の高等師範学校における手工科は、1899(明治32)年に開設された手工専修科(のち図画手工専修科)において上原六四郎が担当するところとなった。日本の手工科教育は、結局は直接にスウェーデンにおいてスロイドを学んだ野尻や後藤によってではなく、周知のように後に高等師範学校に開設された手工専修科を担当した、上原六四郎により発展させられたと考えられる。

上原は、1887(明治20)年6月からの文部省手工講習会で手工教授法を担当し、その後の手工科の展開に大きな影響を与えた。上原の手工教育理論にはサロモンのスロイド教育理論の影響がみられた。その意味で日本の手工科教育に対するスロイドの影響は決して小さくはなかった。

キーワード；スロイド，手工科，スウェーデン，オットー・サロモン，手島精一，野尻精一，後藤牧太，ネース・スロイド教員養成所

1. 本稿の目的

手工科は、1886（明治19）年5月に「小学校ノ学科及其程度」（文部省令第8号）によって高等小学校のカリキュラムに加設科目として、また「尋常師範学校ノ学科及其程度」（文部省令第9号）によってその男子生徒に対して必修科目として、導入された。その後、1890年10月のいわゆる第二次小学校令（勅令第215号）によって尋常小学校のカリキュラムにも加設科目として導入された。手工科は1941年の国民学校令により、教科「芸能科」の中の科目「工作」となり、以後手工科という教科は消滅した。それに対応して師範学校からも手工科はなくなった。その後戦後教育改革により、図画と工作は小学校と新制中学校のカリキュラムの中に図画工作科として統合され、1958年の学習指導要領改訂からは、中学校の図画工作科の教育内容は美術科と技術科に再編成された¹⁾。このような経過のなかで手工科という教科の性格をめぐって議論が分かれている状況がある²⁾。

そもそも1886年に新設された手工科はほぼ同じ時期に学科課程に登場した唱歌や体操などとともに、日本にはその教科成立の背景となる伝統がほとんど全くないに等しい教科で、その成立と普及には幾多の苦心があった。唱歌、体操の成立と普及の過程に関してはいくつかの先行研究が知られている³⁾。しかし手工科の導入については、スウェーデンのスロイドが影響を与えたことなどはよく知られているものの、その導入が唱歌や体操のように指導者を招聘するなど直接にアメリカの影響のもとにすすめられたわけではなかったため、関係史料の発掘に大きな制約があり、研究は著しく遅れている。筆者はこうした事情に鑑みて、手工科成立に関与した当時の日本人とスウェーデン人ことにオットー・サロモンとの交流関係を解明しえる書簡等の史料をスウェーデンの公文書館等において探索することを試み、ある程度成功した。

本稿は、これらの史料から、日本の手工科成立の背景となるスウェーデンのスロイドあるいはフランスの手工を含む当時の国際的な動向に着目しながら、日本における手工科成立過程期におけるスウェーデンと日本の教育交流を具体的に解明し、日本における手工科成立の歴史的な性格を解明する研究に寄与しようとするものである。

なお、本稿では手工科の成立過程期を『手工教科書』

（甲乙丙丁）の発行（1904年）までとしておく。

2. 手工科導入の経過に関する先行研究と本稿の課題

この分野の研究の先駆者である細谷は、「1884年にイギリスが各国の技術教育の状況を視察せしめて作成した“Report of the Royal Commissioners”が文部省総務局において翻訳され、『技芸教育ニ係ル英国調査委員報告』として明治18年に頒布されたのが導火線となっている」⁴⁾と述べた。原は、この『技芸教育ニ係ル英国調査委員報告』の翻訳が発行された時期⁵⁾と、当時の教育諸雑誌が「このReportのことは勿論、文部省訳『英国調査委員報告』についても、ほとんど問題としていない」ことから、「従来の説は当をえていない」。それよりはむしろ1886年の「小学校ノ学科及其程度」に「より直接的な影響を与えたものとして、1885年にフランスのハーブルで開かれた『小学教員万国教育会』に注目すべきで」、この時期に千本福隆が1886年2月1日からフランスに留学をしており、「彼を通じてヨーロッパとくにフランスの手工教育の実情がもたらされたと思われる」とした⁶⁾。この原の見解に対して斎藤は「英国調査委員報告以前に、これらのもの（manual work, manual instruction, handicraftをさす——引用者）を手工と訳したことがないので、手工科という名称それ自体は報告から出て来たということができる」。「（細谷のいう）『導火線』とは、国際的な教科名称である『手工科』という新しい用語の紹介によって、初等教育に工作的、実践的教育の必要性が広く認識され、新科目加設のはずみがついたことを意味していると解すれば、正鵠を得たものと見ることができよう」とした⁷⁾。

他方上里は、1887年の文部省主催の手工講習会で手工教授法を担当した上原六四郎の手工教育理論を分析し、この時期の手工教育理論は「各国の手工教育理論を参考にしながらも、主にフランス手工とスロイド手工の長所の折衷であり、わが国独自の理論であった」としている⁸⁾。これに対して菅生は、「上原は職業訓練的な色彩をもつフランス式より、むしろ普通教育としての意味を重視するスロイド式手工に関心をも」ち、「（フランス式を）避けた」としている⁹⁾。また、宮崎は「手島、上原らが手工科設置に際してそのモデルとしたのは…フランス手工であった」と断定している¹⁰⁾。

以上から、手工科の導入と当時の海外の教育動向との関係については、①手工科設置に対する“Report of the Royal Commissioners”の影響 ②手工科に対するフランスのル・アブルで開かれた『小学教

員万国教育会』の影響 ③日本の手工科とフランスの手工教育との関係 ④日本の手工科とスロイドとの関係 などの検討課題を引き出すことができる。本稿では、手工科とスロイドとの関係を中心に¹⁰⁾、北欧において新たに発掘した史料¹¹⁾と日本に存在する資料に即して、『手工教科書』(1904年)をメルクマールとする日本の手工科教育成立以前の、手工科教育をめぐる日本とスウェーデンとの交流やそれが上原に与えた影響を解明しようとするものである¹²⁾。

3. 手工科導入に至るまでの背景

実業教科目の小学校のカリキュラムへの導入は、1881(明治14)年の「小学校教則綱領」「師範学校教則大綱」によって「土地ノ情况ニ因リ其学科ノ程度ヲ斟酌シ農業、工業、商業等ヲ加フルヲ得」とされたことに始まる。この動きは、アメリカに派遣されていた伊沢修二が1876(明治9)年2月に書いた「麻沙土設州工業進歩之概略 附我国工業ノ教育ヲ興スヘキ按」『文部省雑誌』(明治十年二六号)に「工業振興ノ基本トナルヘキハ工業師範学校ナリ工業進歩ノ場圃トナルヘキハ工業学校ナリ……サレハ今日ノ要務ハ先工業師範学校ヲ開キ次ニ工業学校ヲ興シ若干ノ卒業生ヲ得テ工業生徒ヲ教授セシメ寡ヨリ衆ニ及ホシ小ヨリ大ニ達シ遂ニ全国ニ工業ヲ振興スルノ基ヲ立ルニアラムカ」との見解を寄せていることが発端であると考えられる。

1876年に開催されたフィラデルフィア万国博覧会に田中不二麿文部大輔に随行して参加した手島精一は、阿部泰蔵と二人で書いた報告書の巻三にアメリカのマサチューセッツ州のボストンにある「技芸師範学校」を紹介している¹³⁾。そこでは「画学ハ百般ノ技芸ヲ起スノ根本ナル」ということで、この州では1870年より図画は小学校の必修教科となったこと、その背景には蒸気機関の発明によって製作の費用が減少し、物品の運搬が便利になり、品質の粗悪なものはほとんどその価値を失う状況が出てきたので、「工業ノ本流タル図画ヲ盛ンニシ目ト手トヲ教育シテ目ハ美惡精粗ヲ鑑別シ、手ハ自在ニ運轉スルノ用ヲナシメサル可カラス」状況が生まれたとされている。また同時に「仏国政府ノ委員、図画ノ緊急ナルヲ論シテ曰ク図画ハ技芸教育中最モ重要ナル科目ナリ仏国製造ノ精巧ナルモ広ク図画ヲ教フルニ因ルト……故ニ小学校ノ児童ヲシテ他日職業ニ就キ社会有用ノ人タラシメント欲スレハ図画ヲ教ヘサル可カラス」とフランスにおける図画教育にも注目している¹⁴⁾。

ちなみに、文部省が1881(明治14)年5月の「小学校教則綱領」で小学校中等科(第4、5、6学年)と

高等科(第7、8学年)に「目及手ノ練習ヲ主ト」する図画科を導入していることは注目される。

1878年にパリで開催された万国博覧会に、手島(当時東京教育博物館長補)は出品事務担当として渡仏した。このパリ万国博覧会でのフランスの出品物の品質の優秀さは、それを生み出した「職業教育」への注目を促した。文部省発行の『教育雑誌』第116号(1880(明治13)年)の「仏蘭西小学教育新聞抄 職業教育」(伊東平蔵訳)において、トゥルネフォル区(Travail manuel)の学校が紹介されている。当時フランスでは、“Travail manuel”(手工科)が必修教科として初等教育に導入される直前(導入は1882年)で、1870年代から徒弟学校が各地に設置され、また1880年に「手工徒弟学校および初等教育補習学校に関する法律」が制定され、小学校の中に手工徒弟学校を設置することと高等小学校を職業学校化、徒弟学校化することがめざされていた¹⁵⁾。

「手工」という用語は、管見の限りでは『文部省教育雑誌』に鮫島晋が抄訳した「仏国教育新報抄 サリシース氏述 手工教育」が初出であるように思われる¹⁶⁾。ここには、「凡ソ児童ノ年齢十三年ニ到ル迄ニハ既ニ其手指眼力ヲ養成シテ以テ稍能ク世上ノ利益ヲ生産スベキ種子ヲ製出スルコト敢テ難キニ非ザルナリ」としてフレベールの教育方法を紹介した後に、「ツールヌフォル街ノ郡立学校ノ教授法ヲ左ニ揭示シテ以テ世人ノ注意ヲ喚起セント欲スルナリ蓋シ該校ニ於テハ十一歳ヨリ十五歳迄ノ童男ヲシテ其嘗テ学習セシ所ノ學術ヲ応用セシメンガ爲メニ一千八百七十三年十一月ニ於テ徒弟学校ヲ其内ニ創設セリ而シテ此附属学校ハ通常ノ学校内ニ設クル所ノ工業トハ大ニ其性質ヲ異ニスル者」とされ、続いて3年間の職業教育の具体的方法が紹介されている。

前述のように、フランスでは1882年に手工科を小学校のカリキュラムに必修教科として導入した。『大日本教育会雑誌』第21号(1885年7月)には「仏国教育の事は手島君より御伝承と存候へ共其教育の完備せる事は誠に驚くべきものに御座候特に手^{マニユール}芸^{ワオルク}を小学校に於て教へ候事は仏国後日の富強に大關係を生じ可申と存候」とした記事がある¹⁷⁾。この記事は当時アメリカの「万国工業兼綿業博覧会」のために渡米した服部一三(文部参事官)が辻新次(文部大書記官)にあてて送った書簡(4月18日付)から抜粋したものである。ここでの「手^{マニユール}芸^{ワオルク}」は手工科を意味している。文部省はこの時期には手工科に注目していた。

手工科の導入に大きな役割を果たした手島精一は、「近年手工科の進歩したるは、仏国を称して第一と

すも亦宜ならずや。尤瑞典国に於ては、^{スロイ}slozd 法と称する手工科を設け教授し、其進歩も亦著しと云ふ。」とフランスの手工教育とともにスウェーデンのスロイドにも注目している¹⁹⁾。手島は後に、「是（小学校の手工科—引用者）は、工業の基礎になると云う訳でもないが、小学校の時代に於て手や指の働きを相当に慣らして置けば、それが所謂精巧に物を作ると云う上に於て確かに利益があると思つたからであります。」「況んや手工の事たる、教育の上に於て一つのを完成させると云うことは、手工に若くものはない、他の教育は初めはあるけれども、終りは無い。所が手工に至ると物を完成させると云うので、従つて教育上に効力があると云うことを、是まで私は書物等に於ても見、又実際に知つて必要を感じて居りましたから、英吉利に行つた時なども、瑞典のネイスといふ所に手工科の有名な学校がありますが、其校長と文書の往復などをして意見の交換をしたことがあります。この学校は手工の方では泰斗と仰がれて居るのであります。それで其の後、後藤牧太君が留学する時には、斯ういふ関係から其学校に行つて研究をされたやうな訳であります。」と回想している²⁰⁾。ここで、「英吉利に行つた時」とは1884年に開催されたロンドン万国衛生博覧会を「其校長」とはオットー・サロモンをさしている。このあたりの経緯を次節にみよう。

4. ネース・スロイド^{セミナリウム}教員養成所と日本とのかわり

1878年のパリ万国博覧会において、サロモンの叔父アブラハムソンは、各国の政府関係者や教育関係者を彼の学校に関する展示会場に招待したり、さらにネースへも招待した。この年の万国博覧会において、スウェーデンのスロイド教育の取り組みは世界各国から注目を浴びた。ベルギーの視学官が内務大臣にあてて提出した文書には、スウェーデンのスロイド教育の取り組みについて次のように記述されている²¹⁾。

「大多数の子どもが彼らの将来の生計を立てる手段として手の労働を行うことを運命づけられている。このような子どもたちの実際の生活のスタートを容易にするために、学校に入学する時期からすぐに彼らに有用な作業の遂行による予備的な手先の器用さを身につける可能性を与えること、それがスウェーデンにおいて次第に重視される原則となっている。（中略）私たちが手工学校（Slöjdskolor）と呼ぶこれらの施設は一般的に非常にバリエーションに富んだ方法と異なる原理によって組織されている、たとえばあるものは独立しており、他のものは小学校に併設されている。こ

れらの学校が機能し始めてからまだ日が浅く、それについて判断するほどの経験はない。どこでもまだ実験の段階にある。（中略）これらの施設が努力を注がなくてはならない方向性については、生徒たちを器用な職人に仕立てることを目的とするものではないという認識でおおむね一致している。子どもに一般的な手先の器用さを身につけさせ、労働への嗜好を与え、巧みさと忍耐に加えて調和の重要さとその魅力を理解させることだけを追求することである。」

さらに同文書はネースのスロイド^{セミナリウム}教員養成所に注目し、次のように述べている。

「これらの施設のなかで最も注目に値するのは Elfsborg（エルフスボリ）に位置するネースの施設である。（中略）手工のための教員養成所^{セミナリウム}を設立するという素晴らしい、実りの多い彼の着想は特に注目に値する。アブラハムソン氏はスウェーデンにおける教員養成コースの創設者であり、それはネース以外のどこにもまだ存在していない。」²²⁾

こうして、ネースのスロイド^{セミナリウム}教員養成所の取り組みに対してゴールド・メダルがアブラハムソンに授与された²³⁾。1878年のパリ万国博覧会において、ネースの取り組みがスロイドを担当する教員の養成に取り組んでいたという点で高く評価されていた²⁴⁾。同文書でこのネースのスロイド^{セミナリウム}教員養成所（1年間のコース）における手工の実習のねらいとして「指物作業、旋盤作業、木工彫刻、鍛冶作業などの異なる道具を知ること、これらの道具の扱いに慣れること、簡単な道具や家庭で用いる器具を作ったり修理したりすること、質素な家庭にあわせた家具の製作、荷車の車輪や本体の製作、大きな刃物の製作とヤスリを使った作業」があげられている²⁵⁾。これは職人（あるいはスロイド学校の卒業生）を対象とした1年間のスロイド教員養成コースのものであった。その内容は、1878年のスウェーデンの最初の民衆学校（folkskolan）のカリキュラムのスロイドの内容と対応していた²⁶⁾。

このパリ万国博覧会で、文部省参事官九鬼隆一はアブラハムソンと出会った。清水誠を紹介するアブラハムソンに宛てた九鬼の書簡がのこされている（1878年10月16日付、イエテボリ公文書館所蔵）。清水は、イオンショーピンにあるマッチ工場を見学した後、ネースのスロイド学校を訪問した（1878年12月7日付の清水のアブラハムソン宛て書簡、イエテボリ公文書館所蔵）。その手紙のなかで、清水は「あなたの学校の貴重な製作物はすでに日本に送り、これからずっと大切に保管いたします。その製作物を見るたびに、すばらしいお城と人間味にあふれるあなたの学校を思い出すことで

しょう。」と述べている。清水が日本に送った製作物はスロイド学校の生徒によるものか、1年コースのスロイド教員養成所で製作されたものであったと考えられる。1878年の段階では、民衆学校教員を対象とする講習会はまだ始まったばかりであり、オペレーション（övning）の難易度と組み合わせられた日用品の製作物のセットであるモデル・シリーズはまだ完成されていなかった²⁷⁾。

1884年に開催されたロンドンの万国衛生博覧会において、手島精一（当時東京教育博物館長）はアブラハムソンを介してサロモンと知りあった。手島はサロモンから日本の教師をネースのスロイド教員養成所に受け入れてもよいという書簡をもらい、野尻精一（当時東京師範学校教諭）を派遣する趣旨の書簡（1886年6月5日付、イエテボリ公文書館所蔵）を書いている。この手島の書簡を以下に示す（原文は英語）²⁸⁾

「あなたの学校で私たちの教師に手工を教えてくださいとのご親切な申し出を心より感謝申し上げます。私が文部省に提案したところ、東京師範学校の卒業生である野尻氏がドイツ師範学校で3年間の勉強を終えてから、あなたの手工のコースを学ぶように命を受けました。野尻氏は来週ドイツにたち、到着してからあなたにお手紙を書くと思います。彼はドイツ語も英語も達者で、非常に優秀な若者です。そちらの学校にいる間、特別にご配慮していただければ幸いです。」

また、「日本におけるスウェーデンのスロイド教育」と題された、サロモンの以下にしめす直筆のメモ（イエテボリ公文書館所蔵）では、手島がモデル・シリーズの購入を依頼したことが書かれている（原文はスウェーデン語）。

「東京教育博物館の館長からネースへの注文があった。一つはそこで利用するモデル・シリーズについて、もう一つはスロイド教育のための道具のセットについての注文であった。それは、英語で書かれており、日本の政府が地方の小学校にスロイドの教育を導入させることになりそうであること、おそらく一人の教師がスウェーデンのシステムをより詳しく学ぶためにここに送られる可能性があることが書かれてあった。」

この史料には日付はない。このメモからネースのモデル・シリーズが東京教育博物館に送付されたことが読みとれる²⁹⁾。先の手島の手紙（1886年6月5日付）から、手島が文部省に派遣を提案したこと、文部省は同年5月に手工科を導入した直後にネースに野尻を派遣することを決定したことが読みとれる。

前述したように、文部省は当時フランスの手工教育とスウェーデンのスロイドに注目していた。1886年6月の段階で文部省がフランスではなく、スウェーデンのネースに教員を派遣した理由を考えるためには、1885年9月にル・アールで開催された「小学教員万国教育会議」での議論の内容に注目する必要がある。その会議に日本からは宇川隆三郎（物理学者）が出席したが、スウェーデンからの参加者はなかった³⁰⁾。この会議での議論において、スウェーデンに関して言及されているのは、スリュイ（Sluys）がネースのスロイド教員養成所によって手工科教育が大きく前進していることに言及している箇所と、サリシー（Salicis）がスウェーデンでは手工科は（職人ではなく）教員によって教えられていることを高く評価している箇所の2ヶ所である。長くなるがサリシーの発言を以下に引用する³¹⁾。

「皆さん、私は提案された決議案の中に異なる意見の間に存在する不和を消し去るであろう一語を付け加えることを求めます。手工教育に対する準備の出来ない教員たちに、直ちにそれを担わせるのは全く不可能なことだと思われます。他方で、この教育が教員たちによってできるだけ早く担われることが必要不可欠であると思います。我々はやや理論的な議論をしていますが、ここで実際の例を一つあげます。手工教育が確立された国ではそれは教員たちによってのみ担われています。例えばスウェーデンの現状に注目すれば、現時点で農村部や都市部に600の学校があります。それらの学校、特に農村部の学校の教員たちはネースの教員養成コースに参加した教員たちです。そこでの手工はもっぱら教員たちによって行われ、新しい学校には自分でやれるよう準備された教員がいる時にのみ、その教育を実施するのです。（中略）最後に異なる意見を調整するために決議案に一つの副詞をつけ加え、以下のように提案します。『手工科は教員によって直接教えられるか、または教員の監督のもとで、能力、道徳、行動の点で望ましい資質をもつ職人によって“一時的に”教えられる』」。

このように小学校（民衆学校）教員が手工科を担当するという点でスウェーデンのスロイド教育が、そしてそれを担当できる民衆学校教員を養成している点でネースのスロイド教員養成所がサリシーによって高く評価されていた。このことが、後に野尻精一と後藤牧太がフランスではなく、ネースに派遣される一つの要因であったと考えられる。

5. 野尻と後藤がネースで学んだこと

先の手島の手紙から約半年後のドイツ滞在中の野尻からサロモンに宛てた1887年1月14日付書簡（イエテボリ公文書館所蔵）には1887年夏期講習会には参加できないこと、ネースまでの地図の送付の依頼等が書かれている。同年1月28日の野尻の書簡（同公文書館所蔵）には、サロモンからスリュイのパンフレットを受け取ったこと³⁰、後藤牧太が理科教授法を学ぶためにヨーロッパに来ること、後藤と一緒にネースを訪問することになりそうであること等が書かれている。1888年3月12日には、野尻は同年7月25日から9月4日までのネースでの夏期コースに参加を希望していることをサロモンに伝えている（1888年3月12日付、イエテボリ公文書館所蔵）。しかし、文部省の「許可」を得て、実際に二人がネースに着いたのは、同年8月13日であった³⁰。野尻と後藤はネースでなにを学んだのであろうか。彼らが滞在した期間が8月13日から9月7日であったことは、野尻の1888年10月10日付のサロモンへの書簡（イエテボリ公文書館所蔵）から確定できる。当時の史料から判断すると、彼らは同年7月25日から9月4日まで行われた第43回講習会を受けたことになる。したがって、野尻も後藤も最初の3週間は受講せず、後半の半分を受講したのである。この講習会の内容は、サロモンによる講義とモデル・シリーズのモデルを製作する実習から主に構成された。サロモンの講義は、彼の講義メモ³⁰からスウェーデン語で56回、英語で42回、ドイツ語で23回行われたことがわかる。この講習会でのサロモンの講義は、A. Systematiska（システム）B. Historiska（歴史）C. Metodiska（方法）D. Verktygsövningar（道具の訓練）の4つの部分から構成された。スウェーデン語と英語とドイツ語による講義はほぼ同じ内容構成でなされているが、ドイツ語による講義では、先の4つの部分はひとつにまとめられており、ある程度短縮されていたと推測される。野尻はドイツ語による講義も理解できたが、後藤は英語による講義しか理解できなかった。サロモンの英語での講義のテーマの一覧を書いたメモから、彼らが学んだ内容を知ることができる。前述のように二人は8月13日にネースに到着しているので、そのメモから判断するとA. Systematiska（システム）については第1回から第7回は出席しなかったことになる。第1回から第7回の講義の項目は、序論、スロイド教育学、形式的陶冶と実質的陶冶、労働への愛、肉体労働への尊敬、秩序と正確性、注意深さ、勤勉と持続性、形態感覚の発達等であ

あった。推測にはなるが、これらの項目はサロモンのスロイド教育の原理と方法の根幹をなすものであり、彼らの滞在期間中においてサロモンとの対話や交流などを通してその基本的な内容は学ばれたものと思われる。

そのことは講習会修了後にサロモンに宛てた野尻と後藤の書簡から知ることができる。野尻はサロモンに宛てた書簡（1888年10月10日付、イエテボリ公文書館所蔵）で「ネースでの滞在は、私の生活の中ではほとんど見いだすことができない、そして私が毎日いまだに感謝と喜びをもって思い出す、すばらしい体験でした。残念ながら時間が非常に限られていたこととすべてのコースを経験することができなかったにもかかわらず、スロイド教育（Slöjdunterricht）のためにあなたがうちたて、貴校で実現された、原理と方法を私は本質的に体験することができた」と自負しております。それはとくに原理そのものが明瞭であることとよく検討されたものであること、そして学校の有用な設備によるものです。」とのべ、「スロイド教育の原理と方法」を「本質的に」体験して学んだと書かれている。また、野尻は、サロモンに送った別の書簡（1890年3月7日付、イエテボリ公文書館所蔵）で、「私はあなたの親切な指導によって普通教育としての労働教授（den Arbeitsunterricht im allgemeinen）を知ることができたと思っています」と述べ、「普通教育としての労働教授」を学んだとしている。野尻は、その書簡において続けて、「今、このことを日本においてどのように適応させることができるのかを検討することが私の課題です。しかし、それは日本ではじめて解決されることです。日本でさえ、労働教授に対する世論は非常に好意的です。すでに約50人の師範学校教師が現在フランスで実施されているような労働教授のコース（französischen ähnlichen Arbeitsunterrichtskursus）で養成されました。ただ、私が懸念するのは、そこでは教育学的な観点があまり吟味されていないことです。無批判に労働教授をすすめることは必ずしも望ましいものではありません。」と書いている。ここで、フランスで実施されている労働教授に対して「教育学的な観点があまり吟味されていない」と野尻が述べていることに注目しておきたい。同様のことは、後藤のサロモンに宛てた書簡（1888年11月23日付、イエテボリ公文書館所蔵）においてもみられる。その書簡において、後藤は「日本の教育現場では、学校における手工科の本当の目的について理解していないように思えます。ただ教師の中にはそれを正しく理解している人もいますが。私は日本の文部省にそれに

いて手紙を書くつもりです」と述べている。ネースでの講習会に出席した二人はスロイド教育の原理と方法を学び、帰国後それを実現すべく努力していくことを考えていた。

6. 上原六四郎の手工教育理論へのスロイドの影響

最後に上原六四郎の手工教育理論へのスロイドの影響をとりあげる。上原は、1887(明治20)年7月からの文部省手工講習会で手工教授法を担当し、よく知られているようにその後の手工科の展開に大きな影響を与えた³⁵⁾。上原はフランス語に堪能であったので、その講義録においてもいくつかのフランス語の文献が紹介されている。上原は、この講義録において手工の職を選ぶ際に注意すべき項目として以下の15項目をあげていた³⁶⁾。

- (1) 居職即ち手指のみを運動するの業を避くる事
- (2) 健康を害すべき職業を避くる事
- (3) 不潔なる業を避くる事
- (4) 始終同一なる業を執るは可成之れを避け注意を要すべき業を撰むべきこと
- (5) 分業法に属する業を避くる事

- (6) 諸種の工芸に移転し易き業を撰むべきこと
- (7) 児童の体力に適応する手工を採るべき事
- (8) 贅沢品及び玩弄物を製作することを避け勉めて日常必須の品物を撰んで製作する事
- (9) 美術の思想を養生すべき業を撰む事
- (10) 簡より繁に入り易より難に進むことを得べき業を撰む事
- (11) 学理を指示し之れを応用することを得べき業を撰む事
- (12) 手指の用ひ方に变化多き業を撰む事
- (13) 工具の種類の多き業を撰む事
- (14) 世間に普通なる業殊に諸般の細目に区分し得らるべき業を取る事
- (15) 材料の廉価なる工業を撰む事

さらに上原は、これらの項目に対応して手工科でとりあげる加工法や題材を検討した表を作成している(表1)。

スリュイの報告書³⁷⁾に書かれている同様の項目と上原の先の15項目とを比較した森下は、「上原の教材選択の観点は、ほとんどSLUYSの書物に拠っているが、(1)学理ヲ応用スルコトなどは上原が独自に加えたものと思われる」としている³⁸⁾。

表1 上原による手工科でとりあげる加工法や題材の検討

加工法や題材	項目	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	十の数	十一の数	一の数
鍛冶		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	八	三	四
仕上		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	十二	三	〇
鑄工		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	七	四	四
木工		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	十五	〇	〇
轆轤		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	九	二	四
彫刻		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	十二	三	一
藍細工		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	七	三	五
練細工		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	十	三	二
鑄細工		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	四	二	九
厚紙		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	六	二	七

次にサロモンが作成した表（スリュイの報告書に掲載されたもの）をフランス語より翻訳して表2に示す。

この表が掲載されているスリュイの報告書は1884年に発行されたものであるが、その内容は主に1883年にスリュイがネースの夏期講習会に参加したときのサロモンの講義の内容を紹介したものである³⁹⁾。

表1と表2とを比較すると、上原が手工科でとりあげる加工法や題材の種類を検討する方法はサロモンが講義で展開した方法と基本的には同じであり、上原がスリュイの報告書を通してサロモンの方法から示唆を得たのではないかと考えられる。

また、上原は「手工ヲ課スルニ就テ採ルベキ方法」として「(1)仏国パリーノツールンホールノ小学校ニテハ総テ雛形ノミヲ製作セシム其手本ハ図画及雛形ナリ然レトモ此ノ方法ニヨレハ児童ハ単ニ雛形ヲ以テ実物ナリトシ却テ実物ニ応用スルノ道ヲ解シ難ク且児童等其興味ヲ感スルコト少シ又製作ノ物品ハ積テ山ヲ為スニ至ルモ之ヲ世間實際ノ要需ニ供スルコト能ハズ(2)瑞典ノネース府ノ師範学校ニテハ総テ日用ノ器物ヲ製作セシムルカ故ニ其製作ノ物品ハ皆世間實際ノ要需ニ応スルヲ得ヘシ又児童ハ頗ル之ヲ喜ブヲ以テ其進歩ハ甚タ著ルシ然レトモ茲ニ一ノ困難事アリ即チ製作セシムヘキ物品ヲ選定スルコトト其順序ヲ定立スルコトナリ」⁴⁰⁾と述べている。すなわち、フランスのトゥルネフォル小学校の雛形製作の方法は、子どもの興

味を失わせることや製作物が「実際ノ要需」に合わないという欠陥をもっており、それを克服するためにはネースの「日用の器物」を製作する方法を採用することを上原は提唱しているとみることができる。ただ、ネースの方法には製作物を選定することとその順序を定めることに難しさがあるという指摘もおこなっていることにも注目しておく必要がある。これは日本の各地域での実生活に応じた“モデル・シリーズ”をつくりあげていくうえでの困難点を指摘したものといえることができる。

以上のように上原の手工教育理論にはサロモンのスロイド教育理論の影響がみられた。

7. おわりに

本稿でみてきたように、1878年のパリ万国博覧会において、スウェーデンのスロイド教育やネースのスロイド教員養成の取り組みが注目されていた。この時点では、小学校教員を対象とした手工科担当教員養成の講習会はまだ開始されたばかりであった。スウェーデンでのその後の展開は、スロイド教育が普通教育としての性格を強めていき、ネースのスロイド教員養成所をととして「教育的スロイド」として1880年代から1890年代にかけてスウェーデン全域に確立・普及していった。一方、本稿でみたように手工科を導入した時期のフランスや日本では、「手工」という言葉は、

表2 サロモンによる手工の種類の見直し

	1. 子どもの 興味の 獲得	2. 製作物 の利用可 能性	3. 一般的 な技能の 獲得	4. 秩序と 正確性の 促進	5. 清潔性	6. 子どもの 体力に 適応した もの	7. ある程 度美的な 教育であ ること	8. 体力を 強化する ものであ ること	9. すわっ たままの 姿勢に対 して均衡 がとれる	10. 教育方 法的に配 列可能か
簡単な金工	○&×	○&×	○	○	×	○&×	×	○	○	○
鍛 治	○&×	ある程度○	×	×	×	×	×	×	○	恐らく○
籠 編 細 工	ほとんど×	ある程度○	×	×	○	×	×	×	×	×
絵 画	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
糸 鋸 細 工	×	×	×	○	○	×	○	×	×	○
製 本	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×
紙 細 工	○	○	×	○	○	○	○	×	○&×	○
木 工	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
旋 盤	○	○	×	○	○	○&×	○	少し	○	○
彫 刻	○	○&×	×	○	○	○	○	×	×	○

普通教育としての側面だけではなく、職業教育としての側面もあわせふくむもので、概念としてはまだ未分化であった。したがって、導入直後の日本の文部省の手工科の位置づけはあいまいな部分を残していた。すなわち、1888年11月に出された文部省の下問に対する答申において手工科には「教育的目的」と「経済的目的」があるとされた⁴⁾。「教育的目的」は、普通教育として手工科を位置づける考え方であり、「経済的目的」は職業教育として手工科を位置づける考え方、この時期の手工科は両方の性格をもたされていた。

1885年の『小学教員万国教育会』では、「travail manuel」は当時は「手芸」と訳されていた⁴⁾。この会議において、小学校(民衆学校)教員が手工科を担当するという点でスウェーデンのスロイド教育が、そしてそれを担当できる小学校教員を養成している点でネースのスロイド教員養成所が大きな注目を浴びており、フランスのサリシーがそれを高く評価していたことはこれまで知られていなかった新しい事実である。

手島らの努力により、1886(明治19)年5月から手工科は制度化された。その経過については細谷俊夫、原正敏はじめ諸説があるが、その経過を示す直接的な史料が知られていないので、あまりはっきりしたことはわかっていない。早くから手工科に理解を持ち、その設置に重要な役割を果たした手島は、万国博覧会等で見聞した知見やサロモンとの手紙による交流から、直接にスウェーデンのスロイドに学ぶ必要があると考えて、野尻と後藤をネースに派遣する便宜をはかった。こうした経過で、野尻と後藤はネースのスロイドを直接に学ぶ機会に恵まれた。本稿は、直接にはこの間の経過を解明しようとしたものである。

帰国後の彼らの果たした役割をみると、高等師範学校において後藤が主として担当したのは理科(とりわけ物理)であり、その傍ら一時手工を教えていたことは知られる。また、東京工業学校に師範学校手工科教員養成のためにおかれた機械科特別課程で後藤は手工科教授法を担当した。これらの点で後藤の果たした役割は重要である。しかし、この機械科特別課程は1894(明治27)年に廃止された。また、その後の高等師範学校における手工科は、1899(明治32)年に開設された手工専修科(のち図画手工専修科)において上原六四郎(と上原に招かれた岡山秀吉)が担当するところとなった。

他方野尻については、その経歴や役割の研究が遅れているためか、1890年に諮問され1893年10月に答申された「師範学校小学校手工科取調書」に委員の一人として関係したほかには、手工科教育に貢献した事跡は

これまでのところほとんど知られていない。野尻の事跡を検討することは、手工科教育史研究上の残された課題の1つである。

日本の手工科教育は、結局は直接にスウェーデンにおいてスロイドを学んだ野尻や後藤によってではなく、周知のように後に高等師範学校に開設された手工専修科を担当し、1904年に『手工教科書』甲乙丙丁全4冊をまとめた上原(と岡山)により発展させられたと考えられる。その上原の手工科教育理論においてもスロイドの影響がみられたことは本稿で指摘したとおりである。上原は先述した手工講習会における手工教授法の講義においてモデル・シリーズについて言及していない。手島がサロモンに依頼してモデル・シリーズを購入したことは事実として判明している。上原が講習会のときに参考にしたスリュイの文献は1883年夏のネースでの取り組みを反映したものであり、モデル・シリーズがまだ完成していない段階のものであった。このことが上原がモデル・シリーズについて言及しなかったことにつながった可能性がある。ただ、手島が購入したモデル・シリーズは上原に手渡されたのではないかと推測される。モデル・シリーズという具体的なものによって表現されたものを通して上原はサロモンのスロイド教育の理論と実際とを理解することができたのではないだろうか。

これまでの技術教育関係者による成立過程期の手工科研究はフランス手工の影響を重視してきたきらいがある。本稿では成立過程期の手工科へのスロイドの影響が決して小さなものではなかったことを指摘した。スロイドの影響があったからこそ手工科は普通教育の教科になりえたのではないか。この点については今後の実証にまたねばならない。その意味において『手工教科書』(甲乙丙丁)へのスロイドの影響の分析も今後の課題としておく。

〔註〕

- 1) 拙稿「1958年の技術・家庭科の学習指導要領の普通教育としての性格——文部省職業教育課課内会議の資料にそくして——」『産業教育学研究』第27巻第2号、p.42-p.53、1997年7月
- 2) 1986年に筑波大学造形芸術教育研究会によって「工作・工芸教育百周年記念の会」が開催された。宮協理は『『手工教育五十周年』の期間はいわば両者のせめぎ合い(感性を価値基準とする教育と社会適応のための早期実現教育とのせめぎ合い—引用者)がこの国にもたらされた」と把握している(『工作工芸教育百周年記念誌』p.2、1986年)

- 3) さしあたり、山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』(東京大学出版会、1967年)と木下秀明『日本体育史研究序説—明治期における『体育』の概念形成に関する史的研究—』(不昧堂出版、1971年)参照。
- 4) 細谷俊夫「手工教育変遷に関する一考察」『教育学論集』第一集、1943年 細谷は、鈴木定治『手工教育学原論』の記述をもとに書いている。
- 5) 『技芸教育ニ係ル英国調査委員報告』の翻訳は第一報告が1885年12月に発行され、その内容は「仏国初等教育概況」である。第二報告の十七(1888年10月発行)には「瑞典国ニ於ル手工教育ニ関スル報告」が含まれており、第二報告の十九(1889年3月発行)にはフランスの公立学校に関する報告書が含まれている。
- 6) 原正敏「わが国における普通教育としての技術教育の導入について—1890年前後の手工科—」『教育学研究』第31巻第1号、1964年 なお、ハーブルという地名はより正確には、ル・アープルと表記される方がのぞましい。以下では、引用を除き、そのように表記する。
- 7) 斉藤健次郎「戦前の手工教育」『教育学講座第15巻家庭生活と技術の教育』p.242-p.258、1978年
- 8) 上里正男「導入期の手工教育理論」『日本産業技術教育学会誌』Vol.22, No.2, 1980年
- 9) 菅生均「上原六四郎の手工教育観に関する一考察」『大学美術教育学会誌』第22号、p.6、1990年 フランスの手工科教育を職業訓練的とするこのような見解は美術教育関係者によくみられる。フランスの手工科教育の低・中学年レベルのものは、折紙細工などのフレーベルの考え方の影響を強く受けた内容をもっていたので、「職業訓練的」とする見解は当たっていない。本稿では、フランスの手工科については検討の対象からはずしているので、ここではこれ以上はちいらない。

成立過程期の手工科を扱った技術教育関係者の研究に、森下一期「明治中期における手工教授法に関する一考察—教材の選択、配列を中心に—」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第34巻、坂口謙一「手技の練習と製図・図学学習を重視する手工教育」『産業教育学研究』第24巻第2号、1994年7月、同「普通教育課程における形式陶冶主義工芸教育の成立—手工科の目的規定にみられる「眼及手」の練習の役割—」佐々木享編『技術教育・職業教育の諸相』、大空社、1996年)などがある。これらにはスロイド評価に微妙な差異がみられる。例えば、坂口は前掲で『手工教科書』(甲乙丙丁)を分析し、第6

学年以下の教材編成に注目し、「色板排」「豆細工」「粘土細工」「切貫」「厚紙細工」において幾何学的な図形教材を重視しており、また「色板排」以外の教材には製図ないしは作図の基本学習が重視されていることを明らかにし、この「図学・製図の基本学習の重視は、同じく『図学』を土台に構築されていた19世紀後半以後の同時代的なフランスの『手工』から、むしろ強い示唆を得たものであった」としている。また、後掲において図画科の目標規定等の検討をとおして、「手工科教育の成立は、特殊日本的な創造的精神の育成を企図する工芸教育の面から開発主義の普通教育を強化しようとしたもの」で「成立当初の手工科教育の制度上の性格は、すぐれて『一般陶冶』志向であり、この形式陶冶主義の性格が手工科教育実践のそれを『特異』で複雑なものにし、「その後の手工科の位置づけを動揺させた主要因の一つになった」とし、スロイドの影響を否定的に評価している。

- 10) 宮崎擴道『創始期の手工教育実践史』p.44、風間書房、2003年
- 11) 今回新たに発掘した史料とは、主としてスウェーデンのイエテボリ公文書館(Landsarkivet i Göteborg, Regional archive in Gothenburg)及びネース博物館(Näås Museum)に所蔵されていたものである。前者には、ネース・スロイド教員養成所に関する史料(“August Abrahamsons Stiftelses Arkiv”—以下AASAと省略)が、後者には、サロモンが収集した書籍類や世界各国からの講習会参加者が後日出版した書籍類が保管されている。最近それらの資料については、整理分類され、インターネット上で公開されるようになった(<http://www.naas.se>)。
- 12) サロモンのスロイド教育の教授法を検討した先行研究として、吉兼利恵「教育的スロイドの教授法に関する一考察」『技術教育学研究』第5号(1989年1月)がある。スウェーデンにおける成立期のスロイド教育をとりあげた先行研究としては、松崎巖「教育的スロイドの成立と発展について」『青山女子短期大学紀要』第18号(1964年)、石原英雄「一九世紀に於ける北欧の手工教育」『弘前大学教育学部紀要』第25号(1971年)、遠藤敏明「スウェーデン『学校スロイド』発達史序説」(筑波大学芸術教育学研究誌『芸術教育学』第2号1988年)、同「スロイド教育研究—19世紀末からの歴史的展開と現代的意義」筑波大学博士学位論文(未公刊)1993年などがある。

- サロモンやネースのスロイドについての海外の研究としては、Hans Thorbjörnsson, “Näas och Salomon – slöjden och leken”, 1990, Hans Joachim Reincke “Slöjd – Die schwedische Arbeitserziehung in der international Reformpädagogik –” PETERLANG, 1994, などがある。
- 13) 文部省『米国百年期博覧会教育報告』1887年
 - 14) 文部省『米国百年期博覧会教育報告』巻三, p.31 ~p.36, 1887年
 - 15) 須藤敏昭「フランス初等教育への手労働の導入とその展開」『教育学研究』第37巻1号, 1970年
 - 16) 手工徒弟学校を徒弟手工学校とする先行研究もある(志村鏡一郎「フランス技術教育史」『世界教育史大系32 技術教育史』, p.288, 1978年, 講談社)
 - 17) 「仏国教育新報抄 サリシース氏述 手工教育」『文部省教育雑誌』149号, 1881年6月21日 ただし, 『文部省雑誌』(明治13年116号)の「職業教育」という標題の論文の中でも手工という言葉が出ている。この論文について宮沢康人は次のように述べている。「職業教育の目的として, 一方では『自由貿易』が盛んになるから『精練熟達ナル職工』を養成することが必要になる(『理財』の視点)と言いながら, 他方では, 『間暇ノ憂ナク』するために工作の習慣を身につけるという『社会』の視点および, 学科のつめこみで身体虚弱になるのをふせぐために手工などの作業に従事させるという『養生』の視点をも同時にならべて重視している」(宮沢康人「明治前期における実業学校観形成の一側面——翻訳・紹介からその日本の修正へ——」『学校観の史的探求』(野間教育研究所紀要)1972年
 - 18) 「北米合衆国博覧会へ我国より出品の景況」『大日本教育会雑誌』31号, 1885年7月31日
 - 19) 手島精一「技芸教育の一斑」『手島精一先生遺稿』1940年
 - 20) 手島精一「回顧五十年」『工業生活』第二巻第一号, 1916年11月
 - 21) TH. BRAUN “L'ENSEIGNEMENT PRIMAIRE l'exposition internationale de Paris” p.286-p.287, 1880
 - 22) TH. BRAUN, ibid. p.287-p.288, 1880 エルフスボリとはネースの所在地の県名のこと
 - 23) TH. BRAUN, ibid. p.288, 1880
 - 24) ネースのスロイド学校は1872年に民衆学校を修了した男子を対象として始まった。サロモンは1875年から職人をスロイド教育の担当教員に養成するスロイド教員養成所を始める(これは1882年に廃止された)が, ウノ・シグネウスを訪問した(1877年7月)後, 1878年より民衆学校教員を対象に6週間のスロイド教員養成コースを開始した。
 - 25) TH. BRAUN, ibid. p.289, 1880
 - 26) 1878年に発表されたスウェーデンの民衆学校のカリキュラム(“Normalplan för undervisningen i folkskolor och småskolor”)におけるスロイドの目標は次のように規定されていた。「スロイドの教育に際しては, 男子生徒に普通に(家庭に)存在する道具, とりわけ木工道具, もし旋盤や彫刻や鍛冶などの道具があるならば, そのような道具を使用することをまず教えること, その際に農民にとって特に必要な対象物が製作されるべきである。」
 - 27) サロモンが最初のモデル・シリーズを作り上げたのは, 1882年から1885年にかけての頃であった。1883年にスリュイはベルギー政府からネースに派遣されたが, この時にはまだモデル・シリーズは完成途上であった。1882年頃から1885年頃にかけて, サロモンはスロイド教員養成コースの参加者(民衆学校教員)たちと, あるいはスウェーデン以外の国の参加者たちとの議論を通して, 教育的な順序性を経験的に練り上げ, オペレーション(övning)の難易度と組み合わせられた日用品の製作物のセット(モデル・シリーズ)を作り上げていった。(Hans Thorbjörnsson, “Näas och Salomon – slöjden och leken” p.15, 1990)。
 - 28) この手島の手紙の直筆のものの写しを Lázaro Mareno Herrera・Etsuo Yokoyama ‘Otto Salomon beyond Swedish history of education – Implications for current developments in technology education at the compulsory school –’ “NAGOYA JOURNAL OF EDUCATION AND HUMAN DEVELOPMENT” (The Graduate school of Education and Human Development, Nagoya University) No.1 (2002年1月)の37ページに掲載した。また, 当時ネースで作成された, 後藤と野尻の肖像(シルエット)も同論文にあわせて掲載した。
 - 29) 『教育時論』第11号(1885年8月5日発行)には「手島精一君が英国等ニテ購求セラレタル教育品解説概目」として「瑞典国『ナース』府師範学校木工教授用標品並器具」とあるので, このメモは1885年に書かれた可能性がある。
 - 30) この小学教員万国教育会議の会議録の参加国の一覧にはスウェーデンの国名はない。

- 31) “Compte rendu du Congrès International d’instituteurs et d’institutrices tenu au Havre du 6 au 10 septembre 1885”, p.105, Paris, 1885 (コペンハーゲン大学附属図書館所蔵) 当時フランスにおけるサロモンの方法の受容のされ方については、今後の研究にまたなければならない。現時点で判明している事実は以下のことである。フランス政府は、1882年に E.Schmitt と T.Petit をネースに派遣した (Hans Thorbjörnsson, “Näas och Salomon – slojden och leken” p.14, 1990)。彼らは、バリとナンシーの学校視学官であったが、Schmitt は1883年からサロモンの “Slöjdskolan och Folkskolan IV” をフランス語に翻訳する作業をサリシーとともに開始した (シュミットからサロモンへの手紙は現在1882年10月10日付, 同年11月1日付, 1883年6月3日付, 同年10月6日付, 同年11月25日付が残されている (イエテボリ公文書館所蔵 AASA の E III : 3, 4, 5 及び Ö II b : 2)。それらの手紙 (フランス語) から、翻訳作業の進展状況が読みとることができる)。しかし、実際に本が発行されたのは、1885年であった (Le Travail manuel a l’école primaire”)。
- 32) このパンフレットは、スリュイがベルギー政府に提出した報告書 (Sluys, M A, L’enseignement des travaux manuels dans les écoles primaires de garçons en Suède, Bryssel 1884) であると考えられる。後に上原が手工講習会で手工教授法を講義する際に参考にした文献でもある。
- 33) 野尻精一の電報 (1888年8月12日付) (イエテボリ公文書館所蔵)
- 34) サロモンの1888年の講義メモ (イエテボリ公文書館所蔵) より。
- 35) 尋常師範学校教員免許状 (手工) は早くも1887 (明治20) 年4月から、東京職工学校機械工芸科の修了生に授与されていた (実際に尋常師範学校で手工科が実施されたのは1888年度からであった)。この東京職工学校における手工教授の主たる担当者は上原六四郎であったと考えられる。
- 36) 上原六四郎『東京府学術講義 手工科講義録 上巻』教育書房出版, 1888年
- 37) Sluys, M A, “L’enseignement des travaux manuels dans les écoles primaires de garçons en Suède”, p.60, Bryssel 1884
- 38) 森下一期「明治中期における手工教授法に関する一考察—教材の選択, 配列を中心に—」『名古屋大学教育学部紀要 (教育学科)』第34巻。
- 39) この表はサロモンの著書 (Otto Salomon “Om slöjden sasom uppfostringsmedel” p.75, 1884) にも掲載されている。また、同様の表はサロモンが毎年作成された講義ノート (イエテボリ公文書館に所蔵) にも掲載されている。
- 40) 上原六四郎「手工教授法」『千葉教育会雑誌』第109号, p.8-p.9, 1890年
- 41) 手島精一・上原六四郎・千本福隆「手工科についての答申」『教育報知』第151号, 1888年
- 42) 「小学教員万国教育会議」での手工教育に関する決議をみると、「手工」(travail manuel) という概念には「裁縫」や「園芸」も含まれているので、実践的教科 (practical subject) というような広範な内容を含んでいたと考えられる。なお、この決議は、当時の国際的な手工科教育をめぐる議論の一つの到達点を示していると考えられる。この決議についての翻訳は土屋政朝訳「仏蘭西国ハーヴル港小学教員万国教育会」『大日本教育会雑誌』第参拾五号 (1886年7月) に掲載されている (前掲書p.204-p.206)。

謝辞

1885年のル・アーブルで開催された小学教員万国教育会議の会議録 (“Compte rendu du Congrès International d’instituteurs et d’institutrices tenu au Havre du 6 au 10 septembre 1885”,) については、Ingemar Ottoson 氏 (Kristianstad university) に、イエテボリの公文書館での史料の収集にあたっては Hans Thorbjörnsson 氏 (ネース博物館嘱託職員) にご協力いただきました。フランス語の翻訳については、細井綾女氏、ドイツ語の書簡の翻訳には、Agnes von Fragstein 氏と Annelie Ortmanns 氏にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

**Exchange between Japan and Sweden in the
introduction of “Syukkou-ka”
— Reappraisal of the influence of Swedish Sloyd —**

Etsuo YOKOYAMA*

Key word; Sloyd, Shukkou-ka, Sweden, Otto Salomon, Seiichi Tegima, Seiichi Nojiri, Makita Goto, Nääs Slöjd seminarium, Rokusirou Uehara

In the latter half of 1880's, The Ministry of Education introduced the handicraft subject (Syukkou-ka) into Japanese elementary school's curriculum, having been influenced by the Swedish Sloyd and the handicraft education of France. August Abrahamson (who found Sloyd school at Nääs) and the Japanese (Ryuichi Kuki and Seiichi Tegima) began educational exchanges in 1878. Afterwards, letters between Seiichi Teshima and Otto Salomon (the director of Nääs Slöjd seminarium) were exchanged. Nojiri Seiichi and Makita Goto were sent to Nääs Slöjd seminarium in order to investigate the didactics of Swedish Sloyd, and they learned “work education as general education” in which the purpose of the handicraft subject was put on “formal education”.

The concept of “handicraft education” at that time included not only handicraft education as general education but also handicraft education as vocational education (“industrial education”).

Swedish Sloyd was the center of attention at the elementary school teacher world conference (1885) held in France. Salici, a prominent educator, regarded Swedish Sloyd so highly in the conference. That is one of the reasons why Japanese Ministry of Education decided to send two Japanese to Nääs, not to France.

Handicraft subject was introduced into the elementary school curriculum in May 1886 (Meiji 19) by the efforts of Tegima Seiichi. Tegima, who played important role for the establishment of this subject, thought that it was necessary to learn directly from Swedish Sloyd at Nääs. Nojiri and Goto were sent to Nääs, so they could learn Swedish Sloyd. After returning to Japan, Goto taught mainly science (physics) and partly didactics of handicraft education at the Tokyo Higher Normal School. And Goto taught the didactics of handicraft education at the machinery special course of Tokyo Industry School (Handicraft teachers for normal schools were trained in this course). Goto played an important role in the handicraft teacher training of normal schools. However this course was abolished in 1894 (Meiji 27). And later, Uehara Rokushirou took charge of the didactics of handicraft subject at the special course of handicraft teacher training at Tokyo Higher Normal School established in 1899 (Meiji 32). In 1887, Japanese handicraft education was developed and managed, by Uehara Rokushirou, not by Nojiri and Goto who had learned Swedish Sloyd directly in Sweden. Uehara took charge of didactics of handicraft education in the teacher training seminar 1887 (Meiji 20). One can see Swedish Sloyd influence in Uehara's theory of handicraft education. In particular, influences from Salomon's ideas can be found in the theory of didactics of Japanese handicraft education.

* Associate Professor, Graduate School of Education and Human Development,
Nagoya University.